HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子育て講座における父親の学習過程と意識変容 : さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に
Author(s)	吉岡, 亜希子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 107, 179-193
Issue Date	2009-06-22
DOI	10.14943/b.edu.107.179
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38713
Type	bulletin (article)
File Information	107_009.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第107号　2009年6月

子育て講座における父親の学習過程と意識変容

― さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に ―

吉　岡　亜希子*

Learning process and change of parenting consciousness at the father's study program

― A case study of the Sapporo kosodate network ―

Akiko YOSHIOKA

【要旨】父親の親としての学びに関する実践論がいまだ明らかになっていないという問題意識から市民団体が行っている父親講座での学習過程と意識変容を分析した。現代的な子育て課題として個別化，孤立化，仕事と子育てに関連した問題がある。だが，現状ではこの課題に対応する父親の学びの機会は少ない。今回対象として取り上げる講座は，教育３類型の，ノンフォーマルに位置づくが，その特質によって，性別役割分業観，子育て観，労働観を問い直す契機となりうることがわかった。また，意識変容には①学習者である父親と学習を組織し推進する親が共に学び合う形での話し合い学習②父親，母親のどちらか一方に偏らない構成メンバー③多様な背景をもった子育て経験者の世代間経験交流④継続的な子育て学習を積み上げた学習組織者が条件として必要であることがわかった。本講座は，筆者も実践を組織しつつ，親としての学びを深めている協同学習活動であり，参画型調査という特徴がある。
【キーワード】父親，子育て，仕事，学習過程，意識変容

１．課題と方法

子育てにおいて親の学びは不可欠なものであるが，父親の学びに関する実践論は明らかにしていかなければならない分野のひとつである[1]。鈴木敏正は，教育学の基本領域として①近現代の人格とその主体形成，それに不可欠な教育の基本形態を論じる「原論」②国家・市民社会・経済構造に規定された教育の矛盾的構造の展開論理を扱う「本質論」③学習者の自己教育活動とそれを援助・組織化する教育実践の展開過程を解明する「実践論」④それまでの教育実践を反省的に総括し，未来に向けて新たな発展方向を探る「計画論」の４つを位置づけている[2]。本稿は，このうちの③「実践論」の領域として分析を試みるものである。さらに，父親の学びの構造化への見通しをもった実践分析のひとつとしたいと考える。父親はどのような学びを経て，子育てに関わる意識を変容させ，高めていくのであろうか。ひとくちに学びといってもその形態は様々であるが，ここではフォーマル，インフォーマル，ノンフォーマルの教育３類型[3]の整理から，特にノンフォーマルに位置づけることができる市民団体が行

* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程

う「父親を対象とした子育て講座」に注目する。父親の子育て講座は，行政や病院によるフォーマルなものが多い。出産前後や乳児期の父親を対象としたものを中心に男女共同参画という側面からの父親講座もみられる。例えば札幌市の場合は，「両親教室」「父親教室」「プレパパクラス（両親教室）」といった名称の学習を実施している。これらの父親の子育て学習に関わる事業は，出産や育児に関する知識や技術の習得と父親・家族の協力と子育てについて考える機会づくりを目的として実施されている。実際に父親の学習に関わるのは，行政の担当部局の職員や子育ての専門家であり，その形式も講義スタイルや子育て技術を伝えるための実技指導といった内容が多い。本稿では，こういった行政が行うフォーマルな父親講座とは異なる方法で実践を行っている市民団体「さっぽろ子育てネットワーク」の父親向けの子育て講座を取り上げる。なぜならば，現代社会の子育てにおける最も深刻な課題である個別化，孤立化の問題や父親の子育ての中で最も大きな課題である仕事と子育ての問題[4]，つまり，性別役割分業観，子育て観，労働観の変容につながる独自の学習活動が行われているからである。

子育て，教育の分野では，地域の連携，つまり協同の子育てによって課題を解決していくことが目指されている。そして，そこに学習活動を位置づける必要が確認されている。子育てを中心的に担う母親の学習活動は，各種の子育て講座，母親自身による学習活動（子育てサークル，子育てネットワーク活動など）など，大きな広がりをみせ，協同の子育てへと展開している地域もみられる。一方，父親の子育てに関わる学習活動の分野は，母親ほどの広がりはない。父親の学習活動として，フォーマルな子育て講座のほかに，インフォーマルな父親の子育てグループ活動（おやじの会など）や学童保育活動など一部では展開しているものの，協同の子育てへと展開している事例は限られている[5]。

現代的な子育て課題を乗り越えるには，父親はどのような形で何を学ぶことが求められるのであろうか。さまざまな形で展開している父親の学習活動をひとつひとつ検証し，その学習過程と意識変容を明らかにすることで，父親の子育て学習を構造化する道筋がみえてくるものと考える。本稿では，市民団体が行うノンフォーマルな「父親の子育て講座」において，どのような学習過程があり，意識変容へとつながっているのかを明らかにし，さらに，その意義と共に限界を見極め，父親の子育て学習に必要な要素を示す第一歩としたい。

分析には 2002 年から 2008 年の間に行われた「さっぽろ子育てネットワーク」による父親向け子育て講座（計 6 回）に参加した父親・参加者の議論，発言を取り上げる。6 回の内，前半 3 回は主に乳幼児期の子育てをする父親を対象とした内容である。後半の 3 回は思春期の子育てをする父親や思春期の子育てに備えたい父親を対象とした内容である。6 回の中で特に対象となる子どもをもつ父親の参加が多く，かつ母親も半数程度の割合であった第 1 回と第 5 回の講座を取り上げ，父親の学習過程と意識変容に関わる発言を考察する。なぜならば，意識変容に関わる発言がより明確にとらえられたのが，この 2 回であったためである。また，第 1 回に関してはアンケートの結果も考察に加える。分析視点としては，先にあげた子育ての個別化，孤立化の問題，仕事と子育ての問題をベースに性別役割分業観，子育て観，労働観の変容に注目して分析を行う。本研究の特徴は，筆者がさっぽろ子育てネットワークのメンバーであり，この子育て講座を組織する一人である点にある。また，講座を企画するにあたり，複数のメンバーが学習活動を積み上げつつ関わっている。さらに，これらのメンバーは，当日参加する父親や母親とともに同じ親としての立場で講座に加わり学びを深めている点に本研究の独自性がある。

2．「さっぽろ子育てネットワーク」の概要と講座の意図

分析を行う前に今回取り上げる団体の概要を説明する。なぜならば，この団体の活動内容や団体の運営メンバーが当事者（親）であり，かつ，学習組織者である点が，父親の学びに大きな役割を果たしているからである。実施団体である「さっぽろ子育てネットワーク」（以下，「ネット」と略）は1995年に設立した市民団体である。「子育て，親育ち，子育ち」を合言葉に学習活動を行っており，子育て中の母親・父親をはじめ，教員，学生など幅広い層の市民がメンバーである。筆者も2001年に運営委員として加わり現在も活動を続けている。今回，取り上げる父親向けの子育て講座は，筆者とネットのメンバーが企画・実施している実践活動である。

そもそも，ネットにおいて父親の子育て講座を開くこととなったきっかけは，2001年から2002年にかけて「カナダの子育てテキストを読む会・話す会」を行ったことに始まる。ここでは，ネットの会員を中心に市民も加わり，カナダの子育てテキスト「ノーバディーズパーフェクト」の英文を翻訳しながら子育て課題について議論した。このテキストには，もともと「親」「からだ」「安全」「こころ」「行動」の5編があり，父親が父親のために書いた「父親」編が後に加えられていた。この「父親」編は，専門家が上から押し付ける内容ではなく，父親同士という立場から，若いお父さんへの応援本といえる内容になっていた。メンバーは「親」編の翻訳を行い，続いて，「父親」編の翻訳に取り組み，その成果を冊子にまとめた。「父親」編では，カナダでは父親グループがあることや父親としての関わり方は十人十色であるけれど，子どもにとって父親が重要であるということ，父親になることでのストレスの解消の仕方などが述べられていた。読み進める中で，日本の母親が抱える子育てストレスとカナダの父親の子育てストレスの共通点なども見えてきた。そこで，浮き彫りになってきたのが，“子育てにあまり関わらない日本の父親”と“母親と同じように子育てストレスを感じる場合もあるほど子どもに関わっているカナダの父親”の違いだった。ネットの学習活動は，発足以来，母親向けのものが多く，父親向けの活動も必要であることがこうして強く意識された。このような経過から，2002年の「札幌　子育て　教育　文化フェスティバル」（以下，フェスに略）でお父さんに向けた子育て講座を開くこととなった。（フェスは高校教員を中心に実行委員会を組織して毎年行われている事業である。実行委員としてネットのメンバーも参加している）。

フェスでの父親講座を開催するにあたり，メンバーでの話し合いがもたれ，行政や病院で行われている父親教室，両親教室とは異なる内容で構成することが意識された。行政や病院で行っている父親教室の多くは，妊娠中の妻がいる夫や子どもが生まれて間もない父親を対象とした内容で，沐浴指導，妊婦体験，家族の協力の必要性などを専門家が伝える形式が多い。しかし，ネットの様々な活動，例えば「きいてきいて私の子育てストレス」事業（乳幼児を子育て中の母親や先輩母親が集い気軽に話し合う場）で集まってくる母親の言葉などから，子育て中の母親が最もストレスを感じる時期は，出産前後だけでなく，子どもが0歳から3歳ぐらいまでであること，さらに沐浴などの技術面が未習得ゆえのストレスよりも，父親があまり育児に関わらないことや社会と隔絶した生活をしていること，孤独な育児，つまりなにもかもひとりで背負わねばならない状況に苦しさを抱えていることが明らかになっていた。同時にメンバー内では，父親自身が働き方や子育て，さらには生き方そのものを問う学びの

機会が乏しいことも課題として意識されていた。そのため，さっぽろ子育てネットワークの父親講座では，これらの点を意識した内容として，母親の子育ての実態，社会的な背景，ジェンダー問題への気づき，働くことと子育てについて，自己の労働観を見つめなおす機会づくりとして，子育てで最も重要なこの期間の父親のあり方を議論することを目指した。
なぜ，講義形式ではなく，議論なのか。これもネットの活動から確信をもって行われてきた手法である。専門家が様々な知識・技術，考え方などを講義形式で伝えるよりも確実にしかもより心の深い部分で共感してもらえる方法が，先輩親や同じような子をもつ親同士の議論を中心とした学習交流会という形式だったからである。

3．父親向け子育て講座の概要と展開過程

2002 年の「札幌子育て・教育・文化フェスティバル」において，ネットの活動としては，はじめて父親を主な対象とした講座を行った。表 1 は， 2002 年から 2008 年までに開催した父親を対象とした子育て講座の概要である。いずれの講座も話題提供者をあらかじめ決め，30 分程度話をしてもらい，その後，議論（フリートーク）の時間となるよう設定している。さらに，必ず自己紹介の時間を設けることと，参加者全員に発言する機会を設けることが目指されている。なぜならば①話題提供をすることで議論の時間に話し合う内容の方向が参加者の誰もが把握しやすくなる。②自己紹介をすることで，参加者全員がなぜ講座を受けにきたのかその動機が明確となり，参加者が議論の時間に各々の求める話へと展開することが可能となる③参加者全員の発言機会を作ることで，参加したことへの満足感が高まることや，

表 1　父親向け子育て講座の概要

実践	開催年月日	開催事業名	講　座　名	内　　容	参加者
①	2002/10/6	札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2002	「一緒に子育てしようと思っているお父さん（とお母さん）のための育児講座」	ノーバディーズパーフェクト「父親」編の一部をテキストとし，ネットのメンバーが話題提供を行い,後半は議論。子育て中の父親と母親がほぼ同数であり乳幼児期の子育てについて率直な意見交換の場となる	男性8名，女性7名
②	2002/11/3	女性センターフェスティバル	Nobody's perfect 完璧な人なんていないよ～カナダの子育てテキスト「Father」からヒントを得て	話題提供は同上,後半は議論。子育て中の父親参加者はひとりで子育て中の母親と子育て支援に関わる専門職の参加が多い	女性16名，男性2名
③	2003/9/28	札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2003	「一緒に子育てするお父さん（とお母さん）のための育児講座」	父親の子育てと子どもの育ちに関する資料をもとに話題提供を行い,後半は議論。子育て中の父親が少ない講座となった	女性7名，男性5名

実践	開催年月日	開催事業名	講　座　名	内　　容	参加者
④	2005/11/6	ヌエック･子育てネットワーク研究交流事業「子育てネットワークin北海道2005」	第5分科会「乳幼児期の子育てが思春期･父子関係の明暗を分ける!?」	学童保育に関わる父親と幼稚園でおやじの会OBの父親に話題提供をしてもらい,後半は議論。話題提供の内容は,乳幼児期の関わりの頻度と思春期の父子関係の影響について	女性10名,男性6名
⑤	2007/10/14	札幌子育て･教育･文化フェスティバル2007	「思春期の子育てと父親」	中学校でオヤジの会代表を経験した父親に話題提供をしてもらい,後半は議論。父親の仕事と子育ての問題が大きなテーマとなった	男性9名,女性7名
⑥	2008/11/2	札幌子育て･教育･文化フェスティバル2008	「思春期の子育てと父親」	学童保育指導員(女性)と中学校でオヤジの会代表を経験した父親に話題提供をしてもらい,後半は議論。話題提供の内容～学童保育の方には,「行き過ぎた早期教育と子どもの育ちの危機について」,オヤジの会OBの父親の方には,「父親グループ活動の意義と活動による子育て観の転換について」。教員や子育て支援に関わる参加者が多く,子育て中の父親は少ない講座となった	女性7名,男性5名

初対面の人の前で話すことが苦手な参加者の場合でも，後半になると示唆に富んだ発言をするケースも多いため，司会者は，必ず全員に声をかけ発言を促す工夫をしている。

次に①～⑥の実践内容と展開過程を述べていく。

① 札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2002

テーマ「一緒に子育てしようと思っているお父さん（とお母さん）のための育児講座」

1回目となった2002年の講座は，カナダの子育てテキスト「Father」編を紹介し，それを糸口に父親の子育てを考える機会づくりを目指した。内容は乳幼児の子どもを育てている父親をイメージして構成した。ここに至る経過については先述しているのでふれないが，筆者自身が乳幼児の子育て真っ最中であったことやネットの活動として子育てサロンなどを開催する中で，乳幼児期の子育てが母親にとって大変な時期であり，その困難に父親の子育て観も大きく関わっていることを実感していたことも開催の大きな理由であった。また，ネットの中で講座のタイトル，趣旨を話し合った際，父親だけではなく，母親も一緒に考える場にすることが意識された。“よその家のお父さん”，“よその家のお母さん”と子育てについて語り合う機会をつくり，自分の家族以外の子育てに対する考え方を知ることが大切だと考えたからだった。それはなによりも現代的な子育て課題である個別化，孤立

化した子育ての苦しみを解決するためのステップとして，多様な子育てをまず知ることが必要だとネットのメンバーが理解していたからである。

②女性センターフェスティバル

テーマ「Nobody's perfect」～完璧な人なんていないよ～カナダの子育てテキスト「Father」からヒントを得て

第１回の講座と同様にカナダの子育てテキストを話題提供として用い，ネットのメンバーが内容を紹介した。その後，自由に子育てについて話し合う時間とした。女性センターのイベントであったため，乳児のいる夫婦がひと組，出席していたが，子育て支援活動を地域で展開している女性参加者が多い講座となった。必然的に子育て支援の在り方などが議論のテーマとなった。

③札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2003

テーマ「一緒に子育てするお父さん（とお母さん）のための育児講座」

2003 年のフェスでは，筆者が話題提供者となり，父親の育児行動が数十年に及ぶ夫婦の関係を見通した場合，非常に重要な要素であることを資料などで示し，話題提供とした。さらに，乳幼児の子育てを上手にしている父親を取り上げた「すくすく子育て」のＶＴＲを視聴した。その後，子育てについて自由に議論する時間としたが，子育て中の父親の参加が少ない講座だった。

④ヌエック・子育てネットワーク研究交流事業「子育てネットワーク in 北海道 2005」

第５分科会テーマ「乳幼児期の子育てが思春期・父子関係の明暗を分ける!?」

この講座は，国立女性教育会館（ヌエック）が行っている交流協議会を北海道で開催するにあたり，ネットが受け入れ団体として担ったものである。もちろんネットだけでなく，様々な団体と手を結び，実行委員会を発足させて取り組んだ事業である。この集会のテーマが「つなげよう　ひろげよう　未来への子育てネットワーク　－乳幼児から青少年へ豊かな育ちを結ぶ－」だった。このテーマをベースに，父親向け講座の内容を検討した。その結果，子育ての中でも課題が多い思春期に突然“さぁ，父親の出番”と言われても乳幼児期からの積み重ねがなければ，関係づくりは難しい点が確認され，思春期を見通した子育てを話題提供の内容と位置付けた。話題提供には，共同学童保育で代表をしている父親と成人した子どもがいる父親で幼稚園のおやじの会の活動を経験した方に依頼した。二人に共通していたのは，子どもを愛し，子どもを思って子育てに積極的に関わる意識に加え，育児に奮闘する妻を支えたいという思いが育児行動につながったという点であった。また，わが子だけではない地域の子どもたちとも関わることによる自らの成長，変化についても語られた。2003 年から始まったネットの新たな取組みに「思春期講座」がある。この講座は現在も続けられ，ここでの学びが一つの契機となり，“思春期の子育てと父親”という視点を意識することとなった。2004 年からの事業である「乳幼児親子と中学生の子育て体験交流会」も思春期の子育てを意識する契機となった。また，前後して思春期の子どもが親に刃をむける事件も相次ぎ，思春期の子育て課題が深刻な社会問題としてクローズアップされた時期でもあった。

⑤ 札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2007

テーマ「思春期の子育てと父親」

2007 年のフェスでは，2005 年の「子育てネットワーク in 北海道」の経験や筆者が中学生の子をもつ父親の子育てグループとつながりができたこともあり，「思春期の子育てと父親」をテーマに，講座を開催した。いじめ，荒れ，摂食障害など思春期の子どもが抱える困難は深刻さを増し，親たちも戸惑い，揺れながら手探りの子育てを続けている社会状況の中，思春期の子育てに父親としてどう向き合うことができるのか考える機会を設けたいという思いから講座を企画した。話題提供には，中学校で「オヤジの会」を組織し，活動している父親に依頼した。父親が子育てグループをつくり，活動し，語り合うことの意味，そして，父親としてどう生きていくか，率直にお話しいただくことを目指した。話題提供では，「思春期の子どもとのスポーツを通した交流やオヤジの会を通じた父親同士の交流，教員との交流，わが子以外の子どもたちとの交流の意義，さらに仕事と子育ての関係として，父親の場合，長時間労働やストレス，心の余裕が大きく影響していること」が語られた。

この年は，不登校だった子どもをもつ親や思春期に非行にはしったわが子の体験を語る参加者もおり，乳幼児期とは明らかに異なる子育て課題を認識する機会となった。議論では特に“父親の子育て観と子どもの育ち”，“夫婦で支え合い乗り越える子育て課題”，“父親の過重労働”などが語られた。

⑥札幌子育て・教育・文化フェスティバル 2008

テーマ「思春期の子育てと父親」

2008 年のフェスでは，前年と同じテーマで行ったが，話題提供の内容は，前年と異なるものにした。ネットのメンバーでの話し合いや筆者自身の子育てが乳幼児期から学童期へ移行する中で，早期教育と子どもの育ちの問題が見えてきた。この課題は，その先の思春期へも密接に関わる課題であるという問題意識から，「早期教育と子どもの育ち」と題して，学童保育の指導員の方にお願いすることとした。この年はもう一人，「父親として子どもとの関わりを振り返って思うこと」と題して，中学校のオヤジの会代表を経験した方に依頼した。学童保育指導員の先生からの話題提供では，「週のほとんどを稽古ごとや塾で埋め尽くされて幼児期を過ごした子どもは，小学校へ入るころには，すっかり「勉強＝嫌なもの」となっていること，対照的に幼児期に十分遊んできた子どもは，小学校へ入ると文字や計算を覚えることが楽しくてしょうがないという様子であること，子ども時代に大事なことは，遊びの保証であるということ，学童保育での異年齢交流が上級生を押し上げ，成長させること。幼児期，学童期の育ちが思春期につながっていること」などが語られた。

子どもが中学生の頃に「オヤジの会」の会長を務めた経験のある父親からの話題提供では，「『人に迷惑をかけないように』ということを大切にして，子育てをしてきたけれど，子どもの様子や父親のグループ活動を通し，“人は人に迷惑をかけながら生きるもの”だということがわかってきたこと，子どもたちは，親の過剰な願望に振り回されていること，周りの目を気にするばかりの教育観だったが，グループ活動で教育観が変わったこと，父親のグループ活動は，子どもたちのよりより環境をつくることと，父親としての社会勉強の場であること」などが語られた。また，「一般的に塾は成績を上げるところ。でも，学校はそうではない。心を育てるところ。」－と，学校への期待も語られた。

参加者からは「職場である中学では，三者面談に父親も来ることは，数年前から珍しいことではなくなりました。しかし，教育ママ，だけでなく，父親も母親と一緒になって教育パパになっている家庭の子どもは極端に成績を気にします。そういう家庭の子は，すぐにわかります」という現状が語られた。

以上が計6回行った子育て講座の内容である。講座の対象者，内容から大きく二つの時期に分けることができる。ひとつは，第1期①～③の「乳幼児期の子育てと父親の学び」，二つ目は第2期④～⑥の「思春期の子育てと父親の学び」である。

第1期　①～③「乳幼児期の子育てと父親」
第2期　④～⑥「思春期の子育てと父親」

第1期では，乳幼児の子育て真っ最中の父親，母親が笑いを交えながら，子育てについて語り合った。異世代間も含めた，母親と父親の子育て経験交流の場だったといえる。議論の内容も子どもの世話役割をどう引き受けていくのか，あるいは家事分担など性別役割分業の問題がテーマとなることが多かった。その後，講座を組織してきたネット運営委員の子どもたちも成長し，乳幼児を育てているメンバーがいなくなってきたことやさまざまな学習活動を通して子育て課題は乳幼児期だけのものではなく，思春期，青年期へも続くものであることの理解が進み，講座の内容も変化していった。

こうして思春期へとシフトした第2期の子育て講座は，子育て課題が深刻化する時期でもあり，乳幼児期のような笑いを交えた経験交流とはならず，参加者各々が抱える子育て課題を語り，先輩親が課題をどう乗り越えてきたのかを伝える内容となった。また，父親の置かれている職場環境が厳しさを増している様子も語られた。特に第2期の⑤と⑥での議論は，父親が人間らしく生きることそのものが脅かされている時代であることが語られた。

4．学習過程と意識変容

次に講座の議論を分析することで，父親がどのような学習を経て，意識変容につながっているのかをみていくこととする。子育て講座は計6回行っているが，対象とする父親の違いから区分した第1期と第2期からそれぞれ①の実践と⑤の実践を取り上げる。①と⑤は特にそれぞれ対象とする年代の子どもを育てている父親と母親の参加が高く，意識変容に関わる発言も多いことから対象として選択した。実践①⑤とも筆者が司会を務めた。

4－1－1　第1期「乳幼児期の子育てと父親の学び」を中心とした子育て講座～実践①の分析

実践①

＜話題提供＞～ネットのメンバー（母親）がカナダの子育てテキストの一部をコピーし，「完璧な親などいない」ということ，「パートナーや周りにいる人との良好な関係づくり」，「父親と母親は時として子育てで意見が一致しないこと，違いを踏まえた上で解決する道を探すことの重要性」について語った。

～議論から父親の発言を抜粋し，内容ごとに事例１から４として以下に記す。～

＜事例１＞

父親Ａ：３週間前に男の子が生まれたばかり。朝５時まで子どもをあやしていました。何か勉強できればと思いきました。

父親Ｂ：１歳９か月と９か月の子どもがいます。昨夜は深酒でぐっすり眠ってしまい，妻に「あんなに子どもが泣いていたのになぜ起きないの！」の言われてしまいました。協力したいと思いつつ，こういう状況で反省しています。

母親Ａ（ネットのメンバー）：（父親Ａさんにアドバイスとして）奥さんの睡眠不足をどう解消するかが大切。週末など週に１回でも助けてくれるとうれしい。声をかけてくれたり，抱っこを交替してくれたり，おばあちゃんのヘルプを頼んだりもいい。９か月過ぎるとミルクの間隔もあいて寝だめするので少し楽になれるかな。

＜事例２＞

母親Ｂ（ネットのメンバー）：（３人の子どもがいるが)この子とは気が合わない，私の子とは思えないなどの発言を夫の前で繰り返していたら，夫は敏感になり，だんだん，育児をするようになりました。妻のためというより，子どものために妻のフォローをしはじめた感じです。

父親Ｃ：我が家も子どもを可愛く思えないという妻に子どもを可愛く見せるために子どもを笑わせてみたりすることがあります（笑）。虐待というのは他人事だと思っていたが，積もり積もればあり得るということがわかりました。

母親Ｃ：夫の「もっと子どもにかまってやれ」という一言に，自分なりに一所懸命やっても，夫の満足には至っていないようで，大変なプレッシャーとなっています。

父親Ｃ：話題提供でみたカナダの子育てテキスト「父親」編 23 ページに書いてあった「相手を責めるかわりに自分がどう感じているかを伝えてみる」～とてもいい言葉。妻も言いたいことは言って，ストレスをためないようほうがいいと思います。夫も半分聞いて，半分流すぐらいで…。

母親Ｄ：何年たっても夫との関わりとして意見は話し合ったほうがいい。それはけんかではなく，相手のことを知りたいから。

＜事例３＞

父親Ｄ：私は子どもが３人います。上の２人と３人目は年が離れていて，上の２人の時は，私が若かったこともあって，教員として学校，部活，生徒会と，家にはいない状態で，考え方も男は仕事，女は家事というような封建的な考えでしたが，３人目は違います。

中略

父親Ｄ：なぜ，変わったのか…。う～ん。今は家庭，家族優先。昔は子どもが熱を出しても仕事優先だったが，今は自分も病院へ付いていく努力をしています。

父親Ｅ：うちの子どもが小さなころ，べたべた可愛がり，小さな子はいいにおいがしますからいつも一緒に寝ていました。今，大学生になり東京にいますが，時々行くと一緒に寝ています。子どものころから一緒だとこうなるんでしょうか（笑）。

父親Ｄ：子どもが可愛く見えるのは，自分が手をかけて育てる経験をしているから？

＜事例４＞

母親Ｅ：二人目，三人目を産む産まないの判断はどうしているのか知りたいです。最終決定は妻？夫？母親が抱え込む問題として妻の考えや意見を聞いてくれない，一方的に産めといって，産んでも育児を手伝ってくれない。夫婦関係がうまくいかなくなる。

母親Ｆ：妻の学びにより，夫の操縦法を知ることも必要かも…，封建的な夫のプライドを傷つけずに夫をケアしてから余裕がでたところでお願いする…。

母親Ｇ（ネットのメンバー）：立会出産など増えているがお父さんたちはどう思っているの？

父親Ｅ：日本の育児制度（有給休暇）に疑問を持っています。残業をなしにする法律をつくるとか，会社内で休暇を取れる雰囲気づくりをすすめるなどがなければ，実際には取りにくいのが現状です。

実践①～講座終了後のアンケート

実践①では，終了後参加者にアンケートを配布した。自由記述の部分の結果は以下の通りである。（無記名アンケートであるため記述者は特定できない）

父親参加者アンケート結果

＜感想・意見＞（自由記述）
いろいろな子育ての様子がわかり興味深かった。どの話も自分にも思い当たったり，共感の持てるものでした。カナダの育児については，育児書だけでなく実際の育児の様子や日本との違いなども知りたいです。
短時間でしたが，すごく勉強になったと思います。
日本でも核家族化が進み，ある意味カナダ的なＰＲ活動や父母，親の教育が必要になったのかと思う。地域近所ではない新しいつながりをつくるこころみは大切なことと思う。
ためになるお話，楽しいお話，ありがとうございました。子育てをする上での父親と母親の関わり方などをテーマとしてやってもらいたい。
次回はもう少し話の中身を突っ込んだ形にした方が良いかもしれません。（具体的な話や社会構造など）
とてもためになって，楽しい時間をありがとうございました。

母親参加者アンケート結果

＜感想・意見＞（自由記述）
子育て中の成功体験（こうしたらうまくいった）というのもよいですが，やはり失敗談の方が，学ぶ点が多いと感じました。
お父さんのいろいろな話しが聞けたことはとてもためになった。自分の主人とは違うよそのご主人の生の声，話は大変勉強になりました。またこのような機会をつくってほしい。
色々な年代の方の意見や考え方が聞けてよかったです。特に子育て中のお父さんのお話しが聞けてよかったです。今後の子育てに夫との付き合い方に役立てたいと思いました。
お父さんに限らず，このように人が集まって語り合うのはとてもポジティブなことだと思います。私の一番望んでいた会でした。とても感動し，そして，このような会を設けていただいた方に感謝の気持ちと尊敬の気持ちでいっぱいです。私もこのような会を作っていくことができる事を目標にがんばりたいと思います。
予定では途中で抜けるはずがあまりの面白さに最後までついつい居てしまいました。
これから子どもが生まれる人や子育てを終えた年配の方までが参加していて，それぞれの立場からの発言がありました。特定の年齢，女性だけ，男性だけではない様々な参加者が自由に発言できる雰囲気が良かったと思います。

４－１－２　考察

実践①「乳幼児期の子をもつ父親の学び」は，対象者が乳幼児の子どもを育てる父親，母親である。講座では，母親ひとりが抱える子育ての実態の理解，社会背景，ジェンダー問題，仕事と子育ての問題を学習しつつ交流することが目指されたわけだが，それぞれの事例から見えてくる父親の学びをまとめてみる。まず＜事例１＞では，朝まで夜泣きをあやす新米父親の発話に対し，数か月から１年数か月父親として先輩である参加者から，子どもの夜泣きと父親の行動に関する特徴的な経験が語られる。さらに，ネットのメンバーである先輩母親からは具体的なアドバイスとして，子どもへの視点だけでなく，母親である妻の睡眠不足という課題の解消という視点が提示される。父親Ａは，このとき，発話はしていないが，頷きながら熱心に耳を傾けていた。参加者に先輩父親だけでなく，先輩母親もいることで，父親からの一方向からだけではない視点の獲得か可能となった事例といえるだろう。

次に＜事例２＞である。ここではネットのメンバーである母親Ｂの孤独な子育て，行き詰った子育ての現状が語られた。それを受けて父親Ｃは，母親による虐待がひとごとではなく，父親として虐待予防という観点から何ができるのかを実体験から語っていた。その後，子育てに対する理解のない夫の不満を述べた母親Ｃに対し，父親Ｃは，話題提供で用いたテキストから一つの解決の見通しを示し，母親，父親双方が歩みよるための方法を示す発話へと至っている。ここでは，母親Ｃの父親理解が進んだ場面であり，また，父親Ｃにとっても妻以外の母親の苦悩を垣間見る機会だったといえる。さらに，先輩母親である母親Ｄから対立ではない歩み寄るための経験談が母親Ｃと父親Ｃへ向け語られた。

＜事例３＞は，父親Ｄの性別役割分業観，子育て観，労働観が問い直されている場面といえる。なぜ，男は仕事，女は家庭という封建的だった意識が変化したのかは，最後まで示されなかったものの，母親らの問いかけを受け，それらの価値観を何度も問い直す契機となっていた。

＜事例４＞では，立ちあい出産の増加など，父親の子育てが変化しているが，実際，父親はどのように思っているかネットのメンバー母親Ｇからの質問があがった。直前の母親Ｆの「夫を操縦して…」といった発言もあり，父親Ｅは，現実問題として法律，制度の不備が立ちはだかっているという問題を抜きに父親の子育て問題は語れないと発話している。情緒面や夫婦での解決方法見出そうとする母親の発話と制度面からの解決が必要と考える父親の発話の違いもまた，両者の意識の違いを認識させる学習場面といえるだろう。事例１，２，４では，子育て学習を積み上げてきたネットのメンバーが子育てのコツを伝達したり，子育て経験を語ることによって，参加者の発話につながっていた。

アンケートでは，母親父親ともに他の家族の子育てを知る学習機会を高く評価している。他の父親，他の母親，世代の異なる親経験者との交流機会の必要がこのアンケート結果からも読み取れる。母親と父親の異なる点としては，父親側により具体的な育児事例や社会構造について学ぶ機会を希望する意見がみられたことである。

４－２－１　第２期「思春期の子育てと父親の学び」を中心とした子育て講座～実践⑤の分析

実践⑤

乳幼児期の父親を対象とした実践①では，主に乳幼児期特有の技術的な課題や制度面の課題、

性別役割分業の問題が議論されたが，思春期の子をもつ父親たちが中心の実践⑤では，自分自身の子育て観・価値観と子どもの育ち，仕事と子育ての問題について語られる場面が多くみられた。

話題提供では，父親Ａ’さんが中学校のオヤジの会代表という経験から見えてきたことや自分自身の転職経験を通し問い直した，子育て観や労働観について率直に語られた。

＜話題提供＞～概要「全国的に中学生の非行が問題になっていた平成２年，『このまま母親に教育を任せきりでいいのか』という声が父親たちからあがり，オヤジの会が発足したそうです。現在，生徒とのスポーツ交流や生徒会との交流事業『本音トーク』などを行っています。会のメンバーやＯＢ会の皆さん，それに町内会をはじめとした地域の皆さんと活動をきっかけに知り合うことができました。私は，中学生，小学生，４歳の女の子３人の父親ですが，子育てで最も大切にしていることは，会話をすることです。バレー部で汗を流す長女とは，私自身もバレー部であったこともあり，スポーツの話しをよくしています。オヤジの会に入っていなかったら，学校との接点はまったくなかったと思います。会に入ったことで，先生たちの考えを理解する機会になりましたし，オヤジの会の活動などから，娘の通う学校の環境や友人関係などもわかり，その点は本当に良かったなと思います。

父親の子育てを考える時，仕事との関わりは非常に大きな問題です。私自身もいわゆる仕事人間にならざるを得ない環境にあり，子どもが寝る前のわずかな時間に接点をもつのが精一杯という状況でした。しかし，子どもが小学校にあがるようになった頃，“親子で何かを一緒にする時間は，限られているんだ”と，考えるようになりました。オーバーワークで体調を崩したことも重なり，仕事を変える決意をしました。長く勤めた会社でしたが，もう少しゆとりのある仕事をしたいと妻に話しましたら，妻は『その言葉をいつ言うのかと思っていた』と快く賛成してくれました。父親の子育てを考える時，心の余裕という部分も大事になってくると思っています。父親の気持ちとして，余裕がないと子どもとうまく接することができません。」

～議論から父親の発言を抜粋し，内容ごとに事例５，６として以下に記す。～

＜事例５＞

司会（ネットのメンバー）：思春期の子育てを見通した場合，どのようなことが大切なんでしょうか。経験談をお話しいただけたらと思います。

父親Ｂ’：今は成人している子どもが小学生の時に学校へ行けなくなりました。今思えば，私も妻も一人息子で期待してきたことが，本人には負担だったのかもしれません。専門家のところへ私と妻と子で数年間通いました。ずっと共稼ぎでしたが，この間は，夫婦で語り合えた時間でもありました。中学３年の時に担任だった先生が熱心な方で，クラスの面白い生徒を我が家に遊びに越させたりしました。そんな中，中学最後の学校祭から登校するようになりました。高校へは，下宿をしながら通い，公式野球に挑戦するなど，ガラッと変わりました。卒業後は，専門学校に進み，現在は社会人として働いています。

母親Ａ’：下の子が思春期に荒れた時，夫の支えがあったことは大きかったです。私は，自分の価値観を子どもにぶつけていたと思います。がんばりなさいと。ある時，子どもが仲間と事件を起こして，警察にいました。連絡を受けた時，夫が「驚くなよ」と，穏やかに言

ってくれました。私だけでしたら，きっと慌てふためいてしまったと思います。子どもに会いに行った時，夫は子どもに「体，なんともないか…。体大事にするんだよ」と言葉をかけました。その時，180㌢もある子どもが，はじめて，ぽろぽろと涙をこぼしました。その後，高校に復帰して，チャンスを与えてくれたのは担任の先生でした。学級委員に推薦してくれました。しかし，簡単ではありませんでした。さまざまな課題がありましたが，しっかり子どもと向き合ってくれたのは，夫でした。本当に夫に支えられてきたと思います。

中略

父親Ｄ’：小４と小６の男の子がいますが，子どもには好きにすればいいと言いつつも自分の価値観を押し付けている面もあります。なんでこんなこともわからないんだ，という態度で出てしまうこともあります。怒るタイミングもうまくいっていないなと思う。担任の先生が転勤の時，うちの子は泣けなかった。小さい頃，よく泣く子で泣くなと怒っていたからなのか…。

父親Ｅ’：中１の娘と小５の息子がいます。息子は母親とぶつかることがおおいですね。すべてのことで。母親が正しいことを言うのが気に入らない。価値観のぶつかり合いです。そこに，僕が入ると夫婦の価値観のぶつかり合いになり，我のぶつけ合いになってしまう…。

中略

母親Ｂ’：子育ての基本は夫婦関係ですよと恩師に言われています。何よりも伝え合うことが大切です。

父親Ｈ’：人と人とが結びつくことが非常に難しい状態。どう分かり合えるのか…。

＜事例６＞

母親Ｃ’（ネットのメンバー）：話題提供やこれまでの話しを聞いて，父親は仕事人間からどう脱却するのかが課題だとあらためて思いました。世界的にみても父親は仕事に追い込まれていると思います。

父親Ｉ’：話題提供をされた父親Ａ’さんが仕事を替えられたその行動力や立ち止まって考えることの大切さを感じました。私は仕事で疲労困憊しています。しかし，日本では逆に仕事で忙しくしていることが父親の自慢になっていると思います。

女性参加者：私は23歳ですが，彼は土日も仕事の営業マンで，結婚しても子育てに関わってもらえないと思います。このままでは，結婚をして子どもを産むというきっかけがない状態です。

４－２－２　考　　察

＜事例５＞では，不登校や非行といった思春期の課題について10代後半から成人した子どものいる親の経験談が語られた。ここでは，親の価値観を押し付けることが子どもの育ちに大きく影響を及ぼす可能性があることが示され，この発話をきっかけに，親の価値観と子どもの育ちに関わる経験談が次々と語られた。父親Ｄ’は，これらの語りに耳を傾けることにより，わが子への価値観の押しつけにつながる振る舞いを問い返す契機となっていた。深刻な課題の語りも多く，乳幼児期の講座にみられた参加者の気軽な発話のやりとりは生まれることがなかったが，一人一人がじっくり語る場面がみられた。また，＜事例５＞で特徴的だ

ったのは，子どもの困難を乗り越えるには，夫婦での語り合い，支え合いが不可欠であることが複数の先輩親から示されたことである。一人で抱えるには大きすぎる課題も父親と母親，教員らが支え合うことで，解決の見通しがもてるまで見守ることができたという語りは，世代間交流ならではの展開であろう。

＜事例６＞では，話題提供の父親Ａ’の語りを糸口に仕事と父親の子育ての課題が浮き彫りになった。父親Ｉ’にとって，父親Ａ’の語りが仕事と子育ての問題，さらには生きることそのものを考える契機となったことが伺える。仕事人間にならざるを得ない状況，何のために働いているのか，心身ともに疲労困憊するほどの労働と引き換えに失ったものについての発話がみられた。父親Ａ’の転機について関心をもった父親Ｉ’は，講座終了後も熱心に意見交換を行っていたことからも大きな学びの契機となったことが伺えた。

５．ま と め

以上のように市民団体であるさっぽろ子育てネットワークが行う父親向けの子育て講座～実践①は父親にとって，母親の孤独な子育ての実態把握，母親（妻）へのケアに関する視点の獲得，性別役割分業観，子育て観，労働観の問い直しの契機となっていた。また，母親が父親の現状や意識を理解する機会となっていた。実践⑤では，親の価値観の押しつけと子どもの育ちの関係の理解，夫婦で支え合う子育ての意義，仕事と子育ての問題への問い返しと生き方そのものへの問い返しにつながる契機となっていることがわかった。そして，①学習者である父親と学習を組織し推進する親が共に学び合う形での話し合い学習②父親，母親のどちらか一方に偏らない構成メンバー③多様な背景をもった子育て経験者の世代間経験交流④継続的な子育て学習を積み上げた学習組織者が意識変容につながる条件として必要であることがわかった。本講座は，筆者も実践を組織しつつ，親としての学びを深めている協同学習活動であり，参画型調査といえる。親としての当事者と親としての経験をもつ学習組織者・推進者が協同し作り上げていく本講座は，当事者（父親）と共に，学習組織者・推進者が成長し合う新しい学習の姿といえる。

本稿では，教育３類型においてノンフォーマルに位置づけることができる実践を取り上げた。父親の学びに関わる実践は，このほかにも行政などで行うフォーマルなものや，親父の会，学童保育活動など一見，父親の学習が意識されていないが実際には豊かな学びが展開しているインフォーマルなものもある。今後の課題は，さまざまな形式，レベルでの父親の学びを分析し，それぞれの実践の意義と課題を明らかにすることである。今回分析した講座では，現代的な子育て課題である個別化，孤立化の問題や仕事と子育てに関する問題を意識化する契機となることが確認された。だが，諸課題を乗り越えるためには，意識化のみでは限界がある。子育て課題は，親だけ，あるいは学校・教員だけで解決できるものではない。子どもを取り巻く人々の協同関係が必要である。しかし，本稿で取りあげた講座では協同の子育てへの発展には至っていない点が課題といえる。協同の子育てという点では，親父の会などインフォーマルな学びの中にその可能性を見出すことができる[6]。地域の中で展開するフォーマル，インフォーマル，ノンフォーマルな父親の学びの実践をそれぞれ分析し，その意義と限界を明らかにした上で，本稿も含めこれらを構造化することによって冒頭の問題意識で述べた「父親の学びに関する実践論」の全体が見えてくることになるだろう。そしてさらにその

先には，この実践論をベースにした父親教育の計画化も可能となる。

注

1 父親の家事・育児参加の実態研究は 1980 年代後半以降数多く行われるようになり，近年行われた大規模な調査としては，ベネッセ次世代育成研究所『研究所報』VOl.1「第 1 回乳幼児の父親についての調査報告書」2006，などがある。しかし，父親の学びに関する実践論は少ない。父親を対象とした家庭教育事業の事例報告としては，全日本社会教育連合会『社会教育』41 巻 2 号，1986 で特集が組まれているものや父親の学びという点では，親父の会を新たな市民的公共性の実現への萌芽となる可能性について汐見稔幸「わが国における公共性の実現と男性の育児参加問題」高石恭子編『育てることの困難』人文書院，2007 が言及している論文がある。親への教育プログラム実施のノウハウついては，ジャニス・ウッド・キャタノ『親教育プログラムのすすめ方　ファシリテーターの仕事』ひとなる書房，2002　があるが，ファシリテーター向けの実用書であり，学習者の意識変容などの分析は行われていない。

2 鈴木敏正『現代教育計画論への道程　城戸構想から「新しい教育学」へ』大月書店，2008

3 鈴木敏正『生涯学習の構造化　地域創造教育総論』北樹出版，2001

4 子育て課題について、子育て支援論の領域からは、大日向雅美『子育てと出会うとき』ＮＨＫブックス，1999，同『「子育て支援が親をだめにする」なんて言わせない』岩波書店，2005 などを参照。一方，男性学の領域からは，父親の在り方をめぐる男性の葛藤に焦点を当てた多賀太『男らしさの社会学　揺らぐ男のライフコース』世界思想社、2006　などがある。また，家族社会学の領域からは現代の父親像と育児の課題について大和礼子ほか『男の育児　女の育児』昭和堂，2008　がその諸相の分析を試みている。子どもや子育てそのものの変遷については，柏木惠子『子どもという価値』中公新書，2001　や本田和子『子どもが忌避される時代』新曜社，2007　などがある。

5 母親だけでなく父親が主体的に関わり展開している協同の子育て実践としては，千葉県秋津市がその先進事例として知られている。岸裕司『元気コミュニティ！秋津　学校を基地にお父さんのまちづくり』太郎次郎社，1999 など。　親・住民を主体とする地域子育て共同論については，佐藤一子『子どもが育つ地域社会』東京大学出版会、2002 がある。小木美代子ほか『子育ち支援の創造』学文社、2005 では、地域の先駆的な協同の子育て実践を取り上げている。

6 吉岡亜希子「父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容」『社会教育研究』第 24 号，北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室，2006